

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する「何か」がある。その「何か」を探すための旅に出よう。

自分自身を「どげんかせんといかん！」 謹慎中の危機感が 新しい人生を切り開いた

お笑い芸人→学生→政治家

東国原英夫氏

インタビュー・文／大久保幸夫 写真／谷口智彦

知事にお目にかかったとき、冒頭こう申し上げた。「知事のキャリアはさまざまなキャリア論があてはまる、格好の教材です。特に『芸人学生』（実業之日本社）にお書きになっていることは、まるでキャリア論をなぞっているかのようです」と。「へえー、そうなんですか？」知事は驚いたような顔をされ、後にこの話をブログにもお書きになっている。

昨年、お笑い芸人から政治家へ転身した東国原英夫氏はまさに時の人である。「どげんかせんといかん」は流行語大賞にも選ばれた。そして彼自身の歩んだキャリアも多くのメディアで紹介されたので、ご存じの



ひがしこくばる・ひでお
1980年専修大学経済学部卒業。82年、ビートたけし(ツービート)の一番弟子となり、その後、大森うたえもんとともに漫才コンビ「ツーツーレロレロ」を結成。2000年、早稲田大学第二文学部入学。2004年卒業後、早稲田大学政治経済学部政治学科入学。2006年に中途退学し、2007年1月より現職。



方も多いだろう。

サーカスの中に自分の夢を重ねた少年時代

都城で生まれた東国原氏は、すでに小学校の卒業文集に将来芸人か政治家になりたいと書いている。「父親がサーカスを呼んだとき、そこに出ていたスモールサイズの大人が観客を大爆笑させているのを見て、ああ芸人っていいな、と憧れました。そのようなサーカスを呼べる父親を政治家だと友だちが言っていたので（実際はフィクサー）、政治家もいいなと思った」という。

このときの2つの夢は、徐々に「芸人になりたい」という方へ収束していった。大学卒業時に「お笑い君こそスターだ！」というオーディション番組に出演するとともに、「ビートたけしさんの弟子になる！」と決めて就職(?)した。ビートたけしの一番弟子となった彼は芸人として名を売るのみではなく、1988年には推理小説「ビートたけし殺人事件」を執筆するという文才も発揮している。

その彼に転機が訪れるのは1998年である。仲間と行った風俗店に未成年の女性がいたことからマスコミの批判を浴び、自主謹慎したのである。芸人の常識が世間の常識ではないことを実感し、大いに悩んだ。

これまでの過去を振り返り、自分の歩んできた道にふがいなさも感じた。「どげんかせんといかん！」それはまさに、はじめは自分自身に向けて発せられたものだったのである。

政治家の道へ 退路を断って突き進む

謹慎中に彼が決めたのは、走るのとと学ぶことだった。フルマラソンに挑戦したのは、それまでの生き方がいつもテゲテゲ（宮崎弁で適当の意）で、極限状態に自分を置いたことがないという反省からだった。また勉強しない大学生生活を過ごしてしまったことから、2000年、42歳のときに早稲田大学の第二文学部



に社会人入学した。

彼にいつ政治家になると決めたのかを尋ねると、「早稲田に入学するときはもう頭の中にあっただい」という。その気持ちを実際に表明するのはかなり後になってのことだが、早い時期に子どもの頃のもうひとつの夢を実現する決意があったというのである。しばらくは芸人と学生という二股生活を続け、文学部卒業後は続けて政治経済学部に入學。この段階では、「在学中に自治体の首長選挙があれば立候補する」という気持ちで固まっていた。

その後は周知の通り、前任安藤知事の辞任に伴う宮崎県知事選挙に出馬することになる。かとうかずこ氏と離婚、早稲田大学は中退、師匠であるビートたけし氏の反対を押し切り、退路を断って挑戦し、2007年1月21日、2位の候補に7万票もの大差をつけて当選したのである。

知事の8割が官僚出身者であり、行政経験が皆無で知事になったのは、きわめて珍しい。軋轢も相当にあるだろう。マラソンでもないのに、体力の限界に挑戦しているようなハードスケジュールの日々でもある。

どんな知事を目指すのかイメージはありますかと尋ねると、「官僚的知事になろうと思っても不可能ですから。自分らしい、自分が信じた知事像を追いかけますよ」と語ってくれた。

東国原知事 年表

1957年9月16日	宮崎県都城市に生まれる
1967年	10歳 両親離婚
1976年3月	18歳 宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校全日制課程普通科卒業 高校ではハンドボール部で2年連続インターハイに出場
1980年3月 12月	22歳 専修大学経済学部経済学科卒業 23歳 『笑ってる場合ですよ!』の『お笑い君こそスターだ!』に漫才コンビ「オ・スカル・メスカル」で出場し、チャンピオンに
1982年	25歳 ビートたけし（ツイビート）の最初の付き人（二番弟子）となる
1983年	26歳 二番弟子である大森うたえもんと漫才コンビ「ツイッレロレロ」として『お笑いスター誕生!!』に出場し、金賞を受賞
1985年	28歳 フリーアナウンサーと結婚
1986年	29歳 フライデー襲撃事件により謹慎 謹慎中に「ビートたけし殺人事件」を執筆。ベストセラーに
1989年	32歳 離婚
1990年	33歳 女優のかとうかずこ（現・かとうかず子）と再婚
1994年	37歳 初マラソン参加
1998年	41歳 トラブルにより芸能生活を自主謹慎。謹慎中に猛勉強
2000年	43歳 早稲田大学第二文学部入学
2004年3月 4月	46歳 早稲田大学第二文学部卒業 社会人AO入試で早稲田大学政治経済学部政治学科入学
2006年	49歳 かとうかずこと離婚 早稲田大学政治経済学部政治学科中途退学 所属事務所との契約を解消（事実上の芸能界引退）
2007年	50歳 第17回宮崎県知事選挙（無所属）当選。現職



写真出所：そのまんま東オフィシャルサイト



そのまんま東として人生の午前を生き 東国原英夫として 人生の午後を生きる

インタビューを
終えて

お笑い芸人と政治家を目指した東国原少年には、
一見全く異なる2つの才能があった。

大久保幸夫（ワークス研究所 所長）

心理学者のユング（C.G. Jung）は、40歳を「人生の正午」と呼ぶ。正午には「以前に価値ありと考えられていたものの価値の直し」が起こり、理想の価値のすべてが逆転し、その新しい価値観で自分自身をつくりあげるとい

う。東国原氏は42歳のときにまさしく人生の正午を迎えた。「それまでは稼ぐこと、利益を追求することが大事だと思っていたが、民から公へのような価値観の大変革が起こって、一転して意味とか機能というものを大事に考えるようになった」という。

また自己の有限性の自覚も午後に芽生える意識だが、彼も「残された時間を意識するようになった。あと何年生きられるのかなと考えたら、生への執着心が出てきたし、時間を無駄にできないと思うようになった」と語っている。それによって、抑圧してきた内在欲求が噴出し、思い切ったキャリアの転換をするエネルギーとなったのである。

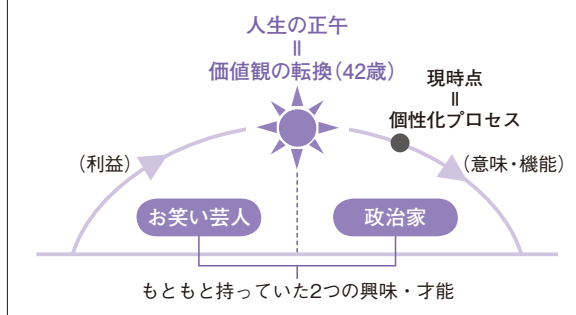
りあげる過程をユングは「個性化プロセス」と名付けているが、東国原氏は、知事という仕事のなかで自分らしい知事像を追い求め、他のどの知事も違う個性的な存在になっているのである。

放置していた才能に もう一度着目する

人はひとつの才能のみを有するわけではない。誰しもが複数の才能を持っているが、職業選択のときにどれかを選び、それ以外の才能をしまい込んでしまう。このような才能をneglected talent（放置された才能）と呼ぶことがある。

東国原氏の場合、お笑い芸人を選じたことで、その後長く政治家への興味や才能を横に置いてきた。それが自主謹慎のときに自分を見つめ直すなかで、押さえ切れないものとして噴出してきたのではないだろうか。もちろん芸人としての才能も失うわけではない。むしろお笑い芸人と政治家という2つの才能を同時に活かすことで知事としての新しい仕事のやり方

東国原氏のキャリア構図



を開拓したのである。

知事としての時間を終えたのち、次にどのようなキャリアを選択するかを尋ねたところ、「まだ考える余裕がない」と笑った。しかし、それを考えるときが来るのを楽しみにしているようでもあった。午後の時間はまだ長い。夕暮れ以降、彼がどのような選択をするのか。それもまた、楽しみになった。